
魔導戦艦ヤマト

サイレント・レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導戦艦ヤマト

【Nコード】

N4778V

【作者名】

サイレント・レイ

【あらすじ】

スカリエッティ事件から1年後、第97管理外世界・地球に向かっていたハラOWN艦隊は未知の勢力に遭遇そして交戦する。

その後彼らが見たものは攻撃を受け滅亡寸前まで追い込まれた地球であった。

そしてハラOWN艦隊が敗退し絶望へと追い込まれた時、地球に連絡艇が到来する。

その船に乗せられたメッセージを信じた地球は一隻の沈没戦艦を修復・改良を施し発信源へと旅立たせる、最後の願いと希望を託して…

第1話 火星遭遇戦

ハラオウン艦隊は長期任務を終え時空管理局・本局へ向け帰還中である。

だが艦隊は指令官の温情で経由地点とした世界へ向かっていた。

そして艦隊旗艦『クラウディア』には研修訓練を兼ねた共同任務として昨年管理局の総拠点があるミッドチルダを震撼した事件において最功労

部隊である機動六課が乗り込んでいた。

クラウディア

「訓練お疲れフェイト」

艦隊指令官を勤めるクロノは疲労感が顔に隠せないでいる義妹フェイトに労いの言葉をかけていた。

「何時やつても宇宙空間での空戦、特空戦きついよ…」

「そりゃそうだよ特空戦は専用の補助器具が必要だし何よりあれには独特の癖があるからなあ…そのせいだろ特空戦は魔導師の中で一番人気のない部門だ」

「それなのに…エリオ達にはまだ早いつて言ったのにはやてが無理やりおし進めたから…で案の定みんなのびっちゃった…」

「僕も反対したんだが…まあはやても自業自得で酷い目にあつたみたいだし罰も兼ねて書類作業を回しておいたよ」

「…ありがとうクロノ」

微笑ましい義理とはいえ兄妹の会話の脇で二重の意味で萱に置かれ、むくれている人物が一人…

「いいなあフェイト特空戦ができて…」

「…なのはまだむくれているの？」

シャルルにも言われたでしょうプラスターの影響がまだ残っているからドクターストップだって」

「でも…」

「そうだぞなのは、それにもうすぐ会えるヴィヴィオが不安になるようなことをしたいのか？」

その一言で彼女のむくれ顔が綻んだ。

先にあげた事件後養女となったその少女とはこの長期任務の関係で彼女の実家に預けざるをえなかったのだが任務初期なのは随分落ち着きがなかった。

まあそんな彼女の気持ちは二児の父であるクロノも分かるので地球に寄ることにしたのだが…

『クロノ提督至急艦橋にお上がりください、繰り返します…』

自身の呼び出しが出たのでとりあえず彼女達と別れて艦橋に上がることにした。

だがこの時から…

「どうした何かあったのか？」

艦橋に上がる時にはクロノは既に少し冷たさがある職務時の顔つきになっていた。

「提督、それが地球圏周辺に艦隊を転移させることが出来ないんです」

「何か次元間自然現象でもあったか？」

「それが…そうじゃないんです」

「…地球に遠くても良いから第97管理外世界の通常空間に転移出来ないのか？」

「火星圏なら可能です」

「じゃあそうしてくれ、それと全艦に戦闘配置をだせ」

「分かりました…」

部下達が命令を実行しているのを艦長席で見ながらクロノはフェイト達と別れた時から感じた悪しき予感が増したのを自覚した。

数時間後ハラOWN艦隊は全艦無事無事に火星圏周辺にて転移に成功した。

「通常空間への転移終了」

「機関、正常」

「船に損傷認めず」

「艦隊に脱落艦なし、全艦異常なし」

クロノは部下達から異常報告がなかったので取敢えずは一安心できた。

しかし自身の目で左手に見える火星から何かを見つけた。

「オペレーター火星の北極点に何かあるぞ…映像を出せ」

オペレーターが命令を実行して映し出した映像に艦橋にいた全員が息を飲んだ

「なんだ、これ…」

誰かが思わず呟いてしまったその映像には彼らが見た事がない物が映っていた。

それは…蟻塚のような建築物を中心にそれより小型の筑紫の形をした多数の建築物がならんだ都市或いは基地であった。

「あれは…地球の物でしょうか？」

「違う…絶対違う！」

部下の推測をクロノは否定した。

「僕は地球に結構関わっていたがあれは彼らの建築思想と全く違う、それに…」

彼は映像を少し動かした。

そして明らかに破壊された痕跡を残す大型機械、間違いなく地球側の探査衛星が映った。

さらにオペレーターが報告した。

”北極点のものから高い魔力反応がある”と…
だか彼らの思考時間はそこまでであった。

「北極点新たな反応を探知、これは…艦隊が出撃している模様です！」

まっすぐ此方に向かってます！」

「ステルス機能はどうした!？」

「展開していますが、相手側は完全に此方を捕捉しています！」

「っ…とりあえずは規則だ、正面の艦隊へ通信”我に交戦の意思なし”と伝える」

「了…」

「前方の艦隊、発砲しました！」

「…何!!」

クロノが感情を思わず顔に出した。

何せ前方の艦隊の撃った一発が後続艦に命中したからだ！

「本射だ…威嚇射撃じゃない！」

「嘘だろ…」

「あいつら時空管理局を知らんのか！？」

「うるたえるな！」

パニックを起こしかけていた部下達にクロノが怒号を発した。そして命じてモニターに映させた敵対行為をした艦隊を構成する細長く曲線フォルムを多用し銀一色の不気味な艦艇を睨み付けた。

「全艦に通達！前方の艦隊を敵と認知する！

本局に緊急通信”我未知の敵勢力と遭遇、交戦す”、第2、第4、第5戦隊はシールドを全開にし応射、第1、第3戦隊は後退しつつマルチ隊形を構成アルカン・シエルの発射準備！」

クロノの命令に思わず『クラウドディア』の戦闘班班長が反応した。

「アルカン・シエルを…しかも一斉射撃で使うのですか！？」

「あいつらと手を取り合えると思うのか？」

戦闘班班長の甘い考えの言葉にクロノは睨みながら返答した。

「…失礼しました。全艦アルカン・シエル発射用意！…」

「航海長、発射陣形が整い次第操縦を戦闘班班長に渡せ、それと…」

クロノ達後衛艦隊がアルカン・シエルの準備を進めている中、前衛艦隊は敵艦隊と正面から打ち合いを続けていた。

最もハラオウン艦隊はアルカン・シエルに賭けており、敵艦隊は拠点の駐留艦隊を順次発進させて全戦力をもつての力押しをしようとしているのかお互い守りに徹しており脱落艦や戦没艦を出していない。そしてハラオウン艦隊は敵艦隊よりも早くに王手を打てた。

「アルカン・シエル、チャージ率90%、まもなく全艦発射準備完了！」

「後衛艦隊前進、前衛艦隊は交戦しつつ後退しアルカン・シエル第2射の用意をせよ」

クロノの指示に従い前衛と後衛が入れ替わったその時は来た。

艦長席から立ち上がったクロノは右手を掲げそして振り下ろしつつ言い放った！

「全艦アルカン・シエル一斉発射！！」

放たれた砲光群は迷い狂わず展開及び展開中の敵艦隊に見事に捕らえ、殆どが爆沈せしめた！

その光景と戦果に思わず『クラウディア』の艦橋要員だけでなく艦隊各所に歓喜の声が上がった。

だがクロノはこんなもので満足しなかった。

「敵の様子は？」

「…敵拠点は混乱しているのか動きが止まっています。」

残存艦隊は…極少数で全艦損傷しているにも拘らずこちらに向かっています！」

「第2射は？」

「…あと5分はかかります」

それらを聞いて少し思案をしてクロノは動いた。

「第1、第3戦隊はこれより敵艦隊へ砲撃殲滅戦を行う、他の戦隊はアルカン・シエル第2射を準備でき次第指示をまたず敵拠点へ向け発射せよ」

そして彼らは勝利への最終作業にかかった。
だがほんの少しだけ簡単にいかなかった。

「…なんて頑丈な艦だ、機関部を打ち抜いたのにまだ打ち返してくる…」

クロノのその言葉通り敵艦艇は恐るべきタフネス振りを見せていた。何せ圧倒的多数で十字砲火を叩き込んでおり、敵のどの艦艇もシールドを張れなくなる処か艦全体から煙を上げしかも止まりかけているというのになかなか沈まず此方へ打ち返してくるのだ。

なお砲撃戦の合間を縫って降服勧告を行っているが全く答える様子がない。

結局最後の艦を沈めたの第2射を放った別隊が砲撃戦に加わった後、敵拠点の方もバリアを失い半壊に留まってたが…

「かなり時間がかかったなあ…敵の様子？」

「敵増援の様子はありません。拠点も沈黙しています。」

「よし、これより敵拠点の制圧に移る。

全艦隊敵の対空砲火に警戒しつつ降下せよ！」

先の艦隊と違い拠点の方は全く動かなかった。

不気味さを感じるほどに…

「提督…全艦配置に着きました」

「ああ…空戦魔導師隊の降下の準備を進めてくれ」

少なくともクロノだけでなく艦橋要員達も敵の沈黙に不気味に感じていた…

そして敵の打つであろう次の一手も全く読めなかった。

だが少しして敵が動いた。

「敵拠点の魔力が急激に増大してます！」

「要塞砲が起動したのか！？」

「違います！スピードが異常です！」

「…！くそっそういうことか！全艦隊敵拠点より全速で離脱、奴らは自爆するつもりだ！」

それは少し遅かった…

艦隊の各艦艇が離脱行為を始めた頃には、拠点を中心に大地震が起き、大地が割れ、中心地から光が天へと昇ったとき大爆発が起こった。

その爆発は逃げ遅れた艦や退避路を誤った艦を飲み込んだ…

だが『クラウドディア』はその中に含まれず、退避に成功した。

退避後艦隊旗艦である『クラウドディア』に艦隊の彼方此方から通信士達が悲鳴を上げながら損害を報告してきたが今のクロノには聞き届いていなかった…

彼は退避令が遅れた後悔をしてるのではない、敵の恐ろしい点に気付いたからである。

”今回の敵は捕らわれることを恥としたのか死ぬのなら敵もろととしたのかのどちらかは分からないが明らかに命を軽んじている”と…

「クロノ…クロノ！」

義妹が自身への呼び声に反応しクロノは考えを打ち切った。

考えに集中しすぎてフェイト達が背後に来たことに気付かなかった。彼女達の表情には不安を露わにしている。

自分達を案じてということもあるが故郷・地球を思っただる。

”地球は何処かの勢力と交戦している”この戦いでそれが高い確率であることが分かった。

当然ながら地球には彼女達の友人や家族がいるのだ…

「…地球の現在座標は？」

「はい…今いる火星と太陽を挟んだ反対側にあります。

ただ地球周辺は空間と魔力が不安定のため映像を出すことが出来ません…」

「だったら…目視可能距離まで近づく。

全艦隊警戒を厳にし、前進！」

幸いなことに敵と接触するなどのイレギュラーはなかった。

その間彼らは願った…

”地球よ、みんな無事でいてくて”と

だが…

数日後・地球圏

「これ…本当に地球か？…金星と間違ってないか？」

「…嘘だ…」

「何度も再確認をしました…間違いはありません…金星の位置確認もとれています…」

「…嘘だ…嘘だよ…」

現実を受けいられず騒ぎ始めたのはをフェイトが取り押さえた。
だが彼女もなのはと似た表情だ…

「大気に放射能を確認…致死量を遥かに超える、とてつもない数値です…」

「生命反応…た、探知、できません…」

「っ嘘だぁーーーー！！！！！」

最後には屈み、泣きながら叫んだのはの言葉は、今この場にいる全員が

”現実を否定したい”という心情を表していた。

今彼らが見ているものは、地表の大半を隠すほどの巨大雲に覆われ

た、赤茶けた惑星…

その昔地球初の宇宙飛行士ガガーリンが”青いヴェールを被った花嫁”と例えた青く美しい星・地球の成れの果てであった…

願いは最悪の形で打ち壊された…

第1話 火星遭遇戦（後書き）

感想、ご意見お待ちしております。

第2話 死の星・地球

クラウディア

地球の現状を確認したクロノは管理局へ報告すると同時に地球の詳細な調査を行おうとしていた。

「…そうです。その様に行ってください……ではお願いします……ふう」

クロノは部下へ命じてため息を吐きながら艦長席に深くもたれた。自分を誤魔化しながらの職務を迫行しておりそのことがより精神を疲労させていた。

元々まだ若い彼にとって艦隊指令官は大変な名誉である反面余にも責任は重すぎた。

そのため時折今みたいに押し潰されそうでこの職務を呪い、捨てたいと思うことがあった。

もっともその様にならなかったことに彼の器量の良さが見えるが…暫くそう思いながら天井を見ながら気を休めていたが誰かが近づいてきたことに気付き起き上がった。

「お疲れやなクロノ君」

「ああはやてか…なのはは大丈夫なのか？」

「なのはちゃんなら自室に引き上げさしとるよ。」

ただ一緒におるフェイトちゃんからやとまだ泣いとるようやで」

「そうか…」

天下にエースオブエースと呼ばれるなのはいえど人の子でしかもまだ（微妙なセーフで）少女なのだ。

故郷のこの惨状しかも家族や知人達の生存が絶望的なのだから。だが報告する同郷のはやても目に見えて顔色が悪い。クロノもそのことに気付いて直にきてきた。

「そう言うはやて、君はどうなんだ？」

「正直なところうちも辛い…せやけど動いていた方が気が紛れる…立場もあるしな」

「…お互い辛いな……」

「…せやな」

そして互いに微笑しあつた。

そのおかげで兩人の少し気が紛れた。

「ほんにしても地球に一体があつたんや…どないすれば一年も掛からずにこんなにかわるんやろうなあ？」

「今現地調査も兼ねて地表の土のサンプリングに一隻降下させた」

「ほんまに大丈夫なん、その船？」

「降下させたのは『ハイウィンド』、あの船のシド艦長は柔軟で経験豊富だ。

六課全員の経歴を足してもあの人の足元にも及ばないよ」

「…そっか」

最早彼らは地球を見ながら待つしかなかった。
彼らがいる艦長席の下部では艦橋要員達が休み無く動き回っていた
が…

ハイウィンド

同時刻クロノの命を受けた『ハイウィンド』はまさに地球の大気圏に突入寸前だった。

そしてこの船の艦長シド・プリヴィアの号令の元に気を引き締めようとしていた。

「いいかお前ら！

俺達は間も無く地球に降下するが何が起こるか分かねえだからこそ気を緩めていたら死んじまう可能性がある。

全員気合入れていくぞ！」

彼が今居る艦橋とスピーカーを通じて艦内各所から「おお！」と返事が上がってきている。

手が空いている者にいたっては拳を上げながらそうしている。

その性か何所へ殴りこみに行く様に見えた。

こんな光景からこの船の気質が見えた。

だがオペレーターが大気圏突入への秒読みを開始すると乗組員達は迷い無く全力で己が職務を追行しだした。

シド艦長の鍛錬の充実と彼への信頼の表れが出ていた。

だからこそいきなりトラブルが発生しても冷静な対応が可能としていた。

詳しく言う突入直後突然船体が揺れ、降下速度が増大したのだ。

「おい、今の揺れとこの速度は何だ、何が起こってる！」

『こちら機関、エンジンの魔力の発生率が減少しました！

エンジン出力を3%上げます』

「そんなんじゃ足りん！」

「10%上げる！」

『了解！』

的確でしかも迅速な指示が効いて『ハイウィンド』の降下速度は直に通常値に戻った。

「おい、エンジン出力低下の原因は何なんだ！」

このシドの問いの答えを出すためオペレーターの一人が直ちに調べ始めた。

それと同時に航海長がシドに報告した。

「艦長、船を安定させることができません」

「何？　と言うことは空中停止させることがきんのか！？」

「はい」

「…ならば船を着地させる、出来るな？」

「やってみます」

このシドの方針に副長が反応した。

「宜しいのですか？」

エンジンの出力低下でステルスフィールドが展開出来ないのですよ」

「この環境下で人が生きていると思うか？」

「…極めて少ないかと」

「と言うわけだ、航海長遠慮なくやれ」

シドの期待に答えて航海長は『ハイウィンド』を着陸させた。
船体を少しも揺らさない見事な着陸である。
着陸するやシドは直に動いた。

「陸戦隊、準備できてるな？」

『はい、放射能防御魔法もばっちりです』

「では、直ちに作業を開始しろ」

『了解！』

だが同時に先の原因を調べていたオペレーターが血相を変えて叫んだ。

「待つて下さい艦長！」

「…どうした？」

時既に遅く陸戦隊はハッチを空けてしまった。

そして彼らは信じられない光景をモニター越しに見た。

陸戦隊が外気に触れるや奇声を上げもがき苦しみだした。

唯一隊長は苦しみながらもプライドと執念で直下の土を一握り分持ってきたが順に全員倒れていった。

彼らは全く動かなくなった陸戦隊を暫く呆然と見つめていた。

「陸戦隊、全員死亡……」

「おい、何が起こった？」

クラウディア

地上での出来事とその原因は直にクロノ達の下に上がってきた。

なおこの船を経由して管理局に回収した土と共に伝わっている。
その報告を彼らは目を疑いながら受けていた。

「地上に降りた局員が全員死亡…原因は高濃度放射能汚染だと……」

「オマケに地球全土を汚染しとる放射能は雨を止め、しかも大気中の魔力の吸収を妨害する性質がある…せやから地球が丸ごとAMFで覆われてると同じ状況になっとるって…」

「どうなっているんだ地球は…」

彼らの会話はオペレーターの報告で打ち切られた。

「提督！二時の方角から何か隕石らしき物群が高速で地球に向かっていきます」

「隕石らしきって何だ！？」

「分かりません、兎に角拡大映像を出します」

彼らは見た物、それは確かにオペレーターの言葉通り隕石らしき数個の球体物であった。

しかしその隕石は青い何かの膜に覆われ、そしてその各所に青い炎を吹き上げている異質な物であった。

「…戦闘班班長あれを撃ち落とせるか？」

「駄目です、対象の移動速度が速すぎますし現在の位置ではどの船も射角が取れません」

「…間もなく地球に落下します」

そしてそれらは吸い込まれる様に地球へ落ちていった。

彼らから目視できないほど小さくなって数秒後地球から宇宙空間から見えるほどの巨大な光が起こり、そしてそれが巨大なキノコ雲に変わった。

その光景とオペレーターの報告で彼らは理解した。

「隕石の着弾点を中心に放射能濃度が上がっています」

「…そうかそういうことか！

敵はあの隕石を落とし続けてその着弾の衝撃波と熱で地上をなぎ払い更に放射能で生き残りを皆殺しにしたんだ！」

「ほんとで地球があんな風になった…あんな…あんな水も植物も命もない、何も無い星に変わってしまったんや！」

艦橋要員の一人が呟いた、”とんでもないことをする奴らだ”と…その時オペレーターの一人が地球で何かの反応を見つけた。

「地球のある一点から極めて微弱ですが熱と魔力反応がありました」
「！」

「…あの隕石のものか？」

「場所が全く違います！ それに僅かですが放射濃度が低いんです」
その言葉でざわめきが起こった、そしてある一つの可能性が浮かんだ。

「…いるんや…もしかしたらの話やけど…地球には…まだ生き残りがいるんや！」

「オペレーター…直にその場所を映せ！」

「はい、直ちに…！」

そのオペレーターは嬉々としてモニターに映した、が…

「何も無い…本当に此処なのか？」

「反応は間違いなく此処か…反応消えました」

艦橋要員達から思わずため息と悔しそうな小言と機器を叩く音が漏れた。

だがはやてはモニターの隅で何かを見つけた。

「ちょい待ち、南西に何かあるで！」

そう言われて動かされそして拡大した映像には彼らが思わず疑問か感銘の言葉を漏らした物があった。

それは突き立った船の船首とその近くにポツンと建っているスマー卜な塔の様なのと後方に傾斜した煙突が前後に並んだ物だった。

「随分と古く錆びだらけの物だが…地球の船か？」

「…大和や、戦艦大和や！」

「戦艦…大和？」

「せや、数十年前の世界規模の大戦争で沈んだ地球で一番大きくて強いと言われる海上砲撃戦艦や」

「その大和であれば間違いなくないのか？
同型艦はなかったのか？」

「いや、その…あるらしいんやけどオペレーターさんあれの北か南に同じもんあらへん？すっごい遠くに…」

「……南にありました」

「じゃあ間違いない、あれが大和や。
ほんで南にあるんが同型艦の…ああ武蔵やったな」

「…ところではやて、君は何で詳しいんだ？
普通の女性が興味を持つものじゃないと思うが…あ、君の所のルキノがそうだが」

「忘れたんかクロノ君？うちは元々文学少女やったんやで。
あれを題材にした書物と映画があつたし、それに…」

「……それに？」

なぜかはやて苦笑いをした。

「それに、中学の同級生に代名詞になるほどの大和のマニアがいたんや。

そいつの名前は確か…い…」

その会話は突然の警報で打ち切られた…（オイ）

「大変です提督、七時の方角に艦隊が出現しました。
火星で遭遇したあの艦隊です！」

「…っ！やはり他にもいたか！全艦反転、砲撃戦用意！」

慌しく艦隊戦の準備を始める中はやてはあることに気付いた。

（そう言えば、大和の艦橋部分の船体は上下逆さになった筈…）

はやてはその理由の答えを最後まで自身のみで見出せなかった。

それは先の反応と関連していた。

大和にはまだほんの僅かだが希望への火が灯ろうとしていたのだ…

そして彼女達の知らない所では…

時空管理局・本局

本局のとある執務室、その部屋の主は現在副官と共に事務処理を行っていたが従兵が早急の訪問者が訪れたとの報告に作業を一時的に取りやめその者の入室を許可した。
その入室者を見て副官は驚きながら話した。

「ベンゼル参謀長…次元間国境の巡視に向かわれたのでは？」

「心配はいらんよムーア副官これが終われば直に向かう。
オヅマ次元艦隊司令長官、第83警備艦隊が超高速で管理内次元域を横断している未確認船を発見したとの報告が入りました」

「未確認船だあ？」

「…ベンゼル参謀長、”発見した”と言うことは警備艦隊はその船を捕捉していないのか？」

ムーアと違いオヅマは冷静に要点を指摘した。
失礼ながらその容姿、しかも隻眼でもあって猪突猛進を具現化した
武将・夏侯惇を思わせていたが…

「はい、あまりに高速のため局内のどの艦船も捕らえる処か追尾も出来ないそうです」

「何い！ 管理局の最速艦でも無理だというのか！」

「そうだ、ムーア副官」

「参謀長その船の針路を判別して待ち伏せはできないのか？」

「はい、既に第7主力艦隊にその様に命令を發しました。ただし間に合うかは微妙なところです」

「第7主力艦隊：ああ沖田艦隊か！」

あそこならまず不手際は起こさないでしょオツマ長官」

「それで参謀長、その船は何所を目指しているのだ？」

「第97管理外世界・地球です」

第2話 死の星・地球（後書き）

感想、ご意見お待ちしています。

…もし序盤の歳のこと言っている一文をなのはさんに見られたら殺されるな…絶対……

後、品川庄司・品川曰く”ヒツチコツクのジョーク”を入れました。
下手をすれば小説家になろう初の大暴挙です。

第3話 沖田艦隊と妨害者

?????

「お休みの処お呼び出して申し訳ありません」

「…一体何があつた？」

「先程坊ノ岬沖にて偵察の為と思われる魔力反応を確認しました。例の場所の周辺であつたので作業の一時中止を發しました」

「奴等に”あれ”が知られたのか？」

「それが…反応が異なっておりますので恐らく奴等ではありません」

「では…何処の誰だ？……望遠映像は出せるか？」

「間も無く…ジャミングキャンセラーも準備が出来ております」

「では直ぐに……時空管理局の、しかも艦隊か………例の信号は？
……ない……管理局の艦隊がこんな時に此所で何をやっている？」

現在この場にいる中で最も高い地位にいらっしゃる男性は部下達と推測を始めたが…

「月軌道に転移反応を多数確認！……これは敵、ペスト艦隊です！」

「っ！……それで敵の動きは！？」

「それが…地球を半包围陣を引こうとしていますが何故か地球に背を向けています…」

「…奴ら何を考えている？」

意見を求め部下達に顔を向けたが何れも”分からない”と示した。

「管理局艦隊に動きがありました。全艦舳先をペスト艦隊に向け横陣を組んでいます」

「恐らく全艦隊によるアルカンシエル一斉射撃を行うつもりだな。何か通信は…無い…迷いの無い敵即殺の動きだな…」

「この行動から見て先週観測された火星の爆発反応に関係があると思われる」

「ペスト艦隊、管理局艦隊に気付いて陣形を蜂矢に変更しつつ舳先を管理局艦隊に向けています…新たに小型反応が多数あり、艦載機を発進させている模様」

「艦載機で時間稼ぎをしつつ動きを封じるつもりか…随分と楽観的な動きだが奴らアルカンシエルに何も感じないのか？」

その理由を彼らは間も無く知ることとなる。
そして迎え撃つ側の対応は…

「管理局艦隊側にも小型反応…艦載機ではありません！…これは人です！」

「宇宙装備の魔導師にエアカバーをさせるのか…無茶な大気圏内とは訳が違うんだぞ。」

否、苦肉の策かもしれん…」

彼等が見つめるモニター越しにSF映画の中のみだけと思われるいた宇宙空間での艦隊決戦が行われ始めた。

沖田艦隊・旗艦『エーユウ』

「提督、全艦配置完了しました」

艦隊旗艦『エーユウ』の艦長を兼任する白髭を顔の下半分を覆うほど蓄えた初老の艦隊司令官・沖田十三は表情には出さなかったが満足に頷いた。

「相原、不明船はどうなっている?」

「後十分で艦隊に接触します」

「よし…では直ちに不明船に向け停止要請と警告を出せ」

相原と呼ばれた女性士官は「了解」と答え直ぐに作業に入った。

「真田技師長あの不明船をどう捕らえている？」

「…不明船の速度が早過ぎて正確な解析が出来ませんが異常速度と各地の報告からの非武装らしく進路変更や回避運動を行なった事から推測すると無人の連絡艇でないかと思われます」

技師長を勤める真田志郎の言葉を聞き沖田は口元に手を当て考え込んだ。

相原が不明船の接近を報告するまでしていたがどうやら答えは出なかった様である。

たが誰にも気付かれずに一瞬だけ苦しそくに顔を歪めながら胸元を押さえた…

「不明船は間も無く目視可能距離に入ります。
進路は変わらず停止に応じる様子はありません」

先の真田の見解と相原の報告に沖田は動いた。

「全艦、捕獲用意！

旗艦からの指示を持って一斉に軟質シールドを展開し不明船にぶつけ強制停止させる」

沖田の指示の元に艦隊各所が動き出した。
実行されるその時…

「新たに接近する戦闘機と思われる小型物を確認！……当艦前方の空間に向け小型物を発射しました。」

相原の報告に艦橋にいた者全員が反応した後それは報告通りの空間に炸裂し強烈な光を放った。

彼等だけでなく艦隊全体が目を眩ませ更にもう一つ放ち今度のは無数の蛍か小雪の様な多数の物を放出した。

「レーダーに異常発生！」

「…前者は閃光弾で後者はジャミングだったんだ」

先の現象と相原の悲鳴を上げながらの報告から真田が冷静に分析し答えた。

「相原、不明船は？」

沖田の質問に相原が返答する前に彼等には答えを見た。
本来の目的の不明船はこの隙によりにもよって『エーユウ』の真横を通り艦隊をすり抜けてしまった。

?????

「よし、うまくいった！」

パイロットは沖田艦隊を妨害し目的の船を地球へ向かわせると言う任務を取りあえずは達成でき小さくガッツポーズをとった。

「無茶シナイデ下サイxxx」

「わかってるわよチャム…！」

その時機体に大きな振動が起こった。

その原因は沖田艦隊が発砲し被弾したことを悟った。

エーユウ

「技師長、回収した妨害機の調査の結果は？」

「機体の後半分は吹き飛んでしまいましたが残りの部分と搭乗者は気を失っていますが無事です。

なお搭乗者は現在医療班が診ております。

…が気になる点が」

「…何か分かったのか？」

「搭乗者は管理局の制服を着ており回収された機体はコスモタイガーの改良機なのです」

「コスモタイガー…だと？」

沖田は特に後者に反応した。

コスモタイガー…それは時空管理局が現在開発中の戦闘機であり現時点では改良機処か量産機すらなく試作機しか存在しないのだ。

当然ながらその試作機のテスト飛行や強奪の報告は上がっていない。

「それと相原不明船はどうなった？」

「管理局の領域を既に抜けていますが予測通り地球に向かっていきます」

「当艦隊はどうします？」

今地球圏にいるハラオウン艦隊に引継ぎを打診して帰還しますか？」

副官が沖田に質問をするとはほぼ同時にそのハラオウン艦隊に関する報告が入った。

「沖田提督、ハラオウン艦隊の通信を傍受、地球軌道に敵と交戦状態に入った模様です！」

相原の報告を聞き艦橋にいた者達、否艦隊の全員が沖田の決断を待った。

そして沖田は決断した。

「全艦に通達、当艦隊は不明艦追撃のため地球に向け直ちに発進する！」

尚遭遇戦やハラオウン艦隊の援護の可能性を鑑み総員戦闘配備に着け！」

艦橋要員達だけでなく艦隊各所から一斉に「了解！」という返事が沖田の元に届き艦隊は直ぐに動き始めた。

数刻後

「例の捕虜が目を覚ましたと聞いて来たのだが…」

訪れた沖田の質問に見張り役の衛兵は敬礼した後室内に通した。

室内には取調べていた士官数人と手錠を掛けられた何処か気の強そうな女性がいた。

そして沖田は士官に手錠を外した後退室する様命令した。

士官達が退室し沖田と二人きりになると女性は起立、姿勢を正した後彼に敬礼した。

「身分証を見せてもらったが：ヨウ・ハグロであったね：君に幾つか尋ねたい。身分証その物は確かに管理局が発行した本物であったがデータベースにはヨウ・ハグロと言う人間は存在しない：君は一体何者だ？何をするつもりだ？」

「私の目的と正体はこれに入っております。
内容の扱いと信憑は提督に一存します。」

沖田はヨウが差し出した小型データディスクを迷う事無く受け取った。

「拙い事だが：君は私の知人に何処か似ているな」

第3話 沖田艦隊と妨害者（後書き）

感想・御意見お待ちしております。

第4話 完敗！ハラオウン艦隊

クラウディア・艦橋

クロノ達がモニターを通して見る宇宙空間での制空権を巡った魔導師と戦闘機による戦いは何とか味方側が優位に進んでいた。

クロノ本人は主に義妹が同僚達と共に獅子奮迅する光景を見ていた。

『…クロノ…アルカンシエルの…射程圏まで後どれ位！？』

「後十分だ。」

もう少しなんだフェイト頑張ってくれ！」

『りょ…くつ、了解！エリオ行くよ』

フェイトに疲労が目に見えていたが任務遂行の為エリオと共に敵機群に切り込んで行った。

「はやて、敵艦隊は後十分で射程圏に入るそれ間で持ちそうか？」

『まあ何とか…ひゃ』

通信中にはやての近辺に敵ミサイルが炸裂、しかも此のスキを狙って敵機群が突っ込んで来たが…

『『飛竜一閃』！！！！…主はやて！』

シグナムの此の一撃で数機が撃ち落とされ残りも追い散らされた。

『ありがとシグナム、クロノ君過半数はやられてしもうたけど何とかもたせたる』

「…頼んだ」

元から無茶な命令を命じたとクロノ自身理解していたが立場が無かつたら計器を叩いていた位歯痒さが増していた。
部下達は別であつたが…

「…コスモパンサーがあれば」

コスモパンサー…管理局の現在の主力戦闘機に関する部下の一人の呟きはハラOWN艦隊の要員の殆どの思わずにいられない事であつた。

その機体は魔導師至上主義と大艦巨砲主義による戦闘機無用論によつて追いやられ製造が中止しており、老朽化している残存機が補修しながら誤魔化して使用する程の事もあつて此の艦隊処か数多ある時空管理局艦隊に僅か数個艦隊にしか配備されていなかった。だが
昨年のJ・S事件での魔導師の大量損失によつて戦闘機が再評価され先日製造が再開、更にパイロット候補生枠の拡大、後継機開発の凍結が解除されたがそのツケを上層部に代わつて彼等が今払わされていた。

そして待ちに待つた時が迫つた。

「敵艦隊、射程圏まで後三分」

「全艦アルカンシェル発射準備完了、命令あり次第発射可能です」

「全魔導師隊は敵機に警戒しつつ直ちに射線軸上より退避せよ」

部下達は直ぐに「了解」の返事をし命令通り行動を起こした。

「敵の動きは？」

「進路は変わらず、しかし減速し密集しています。
後、艦載機隊が撤退を開始しました」

「…特空戦隊を直ちに回収…しかし妙だな」

クロノから見て敵艦隊はアルカンシエルを撃つて下さいと言わん許りの行動に見えた。

「恐らく前方の敵は火星戦を知らないのでは？」

「…じゃあ何で艦載機を下げたんだ？」

楽観的な副官の発言に少し嫌悪感を出し嫌な予感をクロノは感じていたが自身に明確な答えを出せずにいた。

「アルカンシエルの発射へのカウントダウンを開始します……」

「ギリギリまで引き付けるんだ…それとこちらの被害は？」

「前衛部隊が攻撃を受けましたが行動に支障はありませんが…防空戦を行なった特空戦隊が六割をやられました」

案の定大気圏なら兎も角宇宙空間で魔導師を戦わせる事の代価は高く付いた…クロノだけでなく此の報告を聞いた者達は顔を歪めた。
中には上層部への悪口を言う者がいた…

「敵艦隊間も無く射程圏に入ります」

「アルカンシエル発射まで後五秒……四……三……二……一……」

「全艦アルカンシエル発射！」

クロノの号令の元にアルカンシエルが一斉に放たれた！

誰もが先の火星戦と光景と戦果を思い浮かべた……がアルカンシエルの光弾群は目標の手前で全て消滅した。

「て、敵艦隊無傷！」

「どうゆう事だ！？何が起こった！？」

「……恐らく敵はシールドを強化し更に密集する事で個々のものを結合してアルカンシエルを防いだ模様です！」

文字通りの衝撃の出来事であったが此で敵の行動理由が理解出来た。それで一瞬全員固まってしまったがまだ戦いは途中である。

「……っ！何をやっている！

敵の動きは！？」

「敵艦隊急加速して当艦隊に接近……今発砲！」

敵にとっては今の現状は完全なる好機だ此を逃す手は無かった。オマケに……

「提督！アルカンシエル発射直後の為シールドと主砲は使用不能で

す！」

「多達に砲撃戦へ移行、それまで個々に回避運動をせよ！」

指示が遅かった…

標的となった艦艇は行動を起こす前に敵の砲火に捕われた。

「前衛の第二戦隊に被弾多数、何隻かは轟沈！」

「轟沈…轟沈だと！」

まさか砲火力まで…」

「全艦シールド及び主砲発射準備完了！
撃ちます！」

ハラオウン艦隊の報復の砲撃は敵とは真逆の戦果であった。
敵艦船はシールドを張らず装甲だけで弾いた。

「どうした！？

オペレーターまさか敵は…」

「…間違いありません…敵艦船の能力が火星戦のデータと全く異なっています！」

「馬鹿な！」

オペレーターの報告に此の船の技師長が食い付いた。

「火星戦たって…アレからは半月も経っていないんだぞ！
そんな短期間でアルカンシエルの対応強化だけでなくアレだけの…

少なくとも500m級の大型艦艇群をどうやって改良したんだ!？」

その問いを答えられる人物は此の場には誰もいなかった…

そして無力さをあざ笑うかの様に停止していた敵の砲撃が再開された。

ハラOWN艦隊はシールドを最大出力で展開して防御体勢をしたが…

「…っ！右舷に二発被弾！

シールド及び装甲を完全に貫通されました!」

「火器管制室倒潰、主砲使用不能!」

「技術班直ちに応急修理作業を開始!」

『こちら『ブラックジャック』、当艦は操舵不能!』

「第二戦隊…全滅!」

「第五戦隊・戦隊旗艦の艦橋に被弾、司令官以下要員は全滅！
第五戦隊は統制を失い混乱しています!」

『こちら第四戦隊、当戦隊は壊滅の危機！
救援を…救援を!……………うわっ!』

「『ノーチラス』艦全体に火災発生、行動不能……………っ！今誘爆、爆
沈しました!」

「…っ！バリア及びシールド発生装置、航行システムに異常発生!」

「第二発電室に火災発生!」

周囲区画も含め何名か閉じ込められた模様！」

「消火と応急修理、乗組員の救助を急げ！」

同・通路

艦橋からの指示を待たず既に『クラウドディア』
艦内各所では必死の作業が繰広げられていた。

「どうだ、開くか!？」

「……駄目です！
此の隔壁は変形していて開きません」

「急いでヒートカッターを持って来い！
……おい、こっちは足止めを食らっているがお前さん達はどつだ！
？」

『こっちは大丈夫だ！
もうすぐ中に入れ…っ!』

「どうした！
何があつた!？」

『ま、不味い！
外壁が破…あ、ああ、あ
……!』

「…クソッ！
向こうの班は全滅した！」

「だとしたら何とかしないと不味いですよ班長！」

「言わんでも分つとるわ！」

焦る部下を一喝した班長も苛立ちが隠しきれないでいた。
オマケに向こう側の仲間達が隔壁を叩きながら助けを求めている悲鳴が更に増長していた。

「班長、砲撃魔法を使いましょう」

「無理だコイツは超硬質でしかも分厚いんですよ！
我々の力では…」

彼等は指定物を取りに行った筈の仲間に先導され此所に向って来る一団に気付いた。

そしてその構成要員の一人を確認して慌てて道を開き、隔壁の向こう側に叫んだ。

「お前ら壁に急いで寄れ！」

Sオーバーの…エースオブエースの砲撃魔法が来るぞ！」

そして…

「『デイベインバスター』！！！」

放たれた桜色の光線は彼等を悩ませていた隔壁を跡形も無く吹き飛ばした！

「…す、スゲエ…」

現状を忘れて呟いた彼等の一人の言葉は彼等の心情を表わしていた。

「機動六課です。」

「…作業を手伝います」

「……っ！感謝します高町一尉、消火と救助をお願いします。」

「…て、何をやっている！」

「作業を始めるぞ！」

一喝で我に帰り彼等は消火と併合して火災の中にある目的地へ突入していった。

彼女達・機動六課も続こうとしたがスバルが息を切らしているのはに気付いた。

「なのはさん…やっぱりブラスターの影響が…」

「…此くらいはまだ…大丈夫だよ…スバル」

「なのははアタシが見てやるからスバル、お前はサッサとやってろ！」

「早くスバル、誘爆するわよ！」

「分った、ティア！」

「それにしても…またこんな事するなんて思っても無かったわ…」

「アタシ等はコイツ等をシャマルとキャロルの所に連れてくぞ」

「うん、ヴィータちゃん」

「大丈夫かなはやて……何とかしてくれよクロノ！」

同・艦橋

「『ファルコン』停止、総員退艦令が発せられた模様です！

…ああ！『ブラックジャック』が『ファルコン』に衝突コースを！

………両艦衝突！」

「敵艦隊中央突破！被害甚大！」

「こちら機関室、エンジン出力低下！

復旧不能！」

「提督、当艦隊は過半数をやられました！

早く指示を！」

悲鳴を上げながらの報告とそれらへの対応を部下達が必至に行いクロノへ目線を時折向けて逆転への期待を願ったが…

「…もう何をやっても無駄だ。

此の船では奴等には勝てない……」

肝心のクロノが折れてていた。
たが彼の呟きは認めたくない現実であった。

「『ハイウィンド』より通信、モニターに出します」

『クロノ、魔導師達の回収は終了した。
そろそろ逃げる準備をした方が良いでしょう』

「逃げる…そうですね」

『…それと、その船は無理そうだな。
乗組員と…っ！司令部の受け入れの準備してやるからサッサとこっ
ちに来い』

「ありがとうございます。
しかし艦隊司令官が…」

『艦隊司令官だからこそだ！
戦いはまだ…っ続いているんだぞ！
まさか船と運命を共にするなんて思っているんだろう。
それは”若さ故の過ち”がまだ使える若僧には早い、若い奴はあ！
…年寄りの言う事を聞いて宇宙遊泳してでも早く来い！』

「…分かりました。
それでは司令部の移設が出来るまで司令官代理として退却準備をお願いします」

『おう任しときな』

遙か年下といえ上官に遠慮無しに言いたい放題言ったシドの通信は

切れた。

普通なら懲罰ものだ…此だから年寄りはその起立して指示を待つ部下達を見渡した後クロノは命じた。

「修理作業を復旧から現状維持に変更する……総員退艦、司令部を『ハイウィンド』に移す！」

ハイウィンド

「『クラウドディア』に総員退艦令が発せられた模様です。脱出第一陣のクロノ提督以下艦隊司令部は間もなくこちらに搭乗します」

「どうやら素直に聞いてくれたな。フェイト執務官あんたの危惧は的中したがもう大丈夫だ」

「ありがとうございます、シド艦長」

実は先の進言の為の通信はフェイトの進言で行われたのだ。

当初はクロノは引き際を見極めれない愚かさを持っていないのでシドには必要はないと言ったがフェイトの本音は違った。

性格上責任感が強いクロノが船に一人残り運命を共にしかねず、その場合退艦する様に説得をお願いしシドがそれを了解してくれたのだ。

「兄想いの義妹を持ってアイツも幸せだな」

「シド艦長には感謝のしようがありません。
私でしたら絶対に聞いてくれないでしたから」

「なーに、気持ちは分らなくも無かったし、それにウチのチビ達…
特に長女に比べれば容易い事だったしな」

「…その人はまさかセリスさんですか？」

「ああ、髪の色だけの気のせいかも知れんがセリスの容姿に君が似ている…が中身は違ってアレはかなり気が強いがな。
まあその性か君の進言を断れなかったよ」

「…こんな絶望的な状況下で冗談を言えるシドは流石としか言うしかない。」

まあそのお陰で此の船の乗組員達は比較的気を落ち着かせて行動していた。

「司令官代理として全艦に撤退準備を通達、損傷艦を後方に下げる代わりに軽症の艦を前面に出す！

但し前面の艦は囷とする為攻撃は牽制のみとし意味が無いシールドを展開せず回避運動を専念しろ！

後方の艦は退艦者を収容し準備出来次第各自に水星域へワープ、全艦撤退を確認した後我々も続く、以上だ！」

部下達がシドの命令に了承の返事をし行動しようとした時…

「艦長！敵艦隊が…」

数刻後

『ハイウィンド』に乗艦後『クラウドディア』の乗組員の件を副官に任せ急ぎ艦橋に入ったクロノが見たものは最低限の事をしながら茫然としているシド達であった。

「シド艦長！…フェイト！」

「…クロノ」

「おう、来たかクロノ」

「…どうしたんですか？」

「我等、突然砲撃を止めて…俺等に背を向けたんだ」

「何だと！」

シドの言葉通り確かに敵艦隊は自分達に背を向けようとしていた。後何故か慌てている様に動きがぎこちなかった。

「敵は…降伏勧告でもするつもりか？」

「それは違うと思うぞ…お前さんは知らないと思うがさっき降伏を表示した味方艦を沈めたんだ。」

火星とそれから奴等に降伏の思想は無いと思うぞ」

それに彼等は背を向ける理由が全く分らなかった。

「兎も角、今の内に撤退準備を…」

そして敵はクロノ達から見てハラウン艦隊の前方へ砲撃を開始した。その事からクロノ達は気付いた。

「オペレーター、敵の砲撃方向に何かあるか!？」

「…前方から超高速移動物体が接近しています! 間違いなく敵は此を狙っています!」

後、進行方向から推測すると物体は地球に向っています!」

クロノ達は知らなかったがそれは沖田艦隊が追っていた不明艦であった。

そのスピードと回避運動で弾幕をすり抜けると思われたが敵艦隊の大胆にも中央を突破直後一発だけ被弾した。

だが失速し錐揉み状態になりながらも目的地へと向っていたが…

その時少なくともクロノ達『ハイウィンド』の艦橋にいた者達は「あっ!」と驚きの声を上げた。

不明艦が進行上にいた『クラウドディア』に衝突した!

不幸中の幸いと言うべきか両艦とも爆発はしなかった。

だが…

「衝撃の衝撃で『クラウドディア』が地球へ行動開始!

このままですと地球へ墜落します!」

同時に転移室からヴィータの通信が入った。

『不味いぞクロノ！『クラウドディア』との同調が途切れて転移出来なくなつた！』

あの艦にはまだ乗組員が…なのは達が残っているんだ！』

ヴィータの言葉に真つ先にフェイトが反応した。

「シド艦長、早くなのは達の救助を…」

例え墜落の衝撃に生き延びても今の地球は致死量の高濃度放射能に汚染されているのだ。

濃硫酸の海に落下するのと同じ事だ。

オマケに…

「敵艦隊、当艦隊へ砲撃を再開しました！」

「提督！艦長！全艦ワープ準備完了しました！命令有り次第撤退出来ます！」

「…クロノ…敵の足並みが乱れている…今が好機だ」

「待つて下さいシド艦長！

『クラウドディア』が…」

フェイトの必死の進言にシドは辛そうに首を横に振った。

「距離が開き過ぎた…それに此の状況では俺等は何も出来ない…早くしないと全滅する」

そしてクロノは命じた。

「全艦直ちにワープ……………畜生!!」

最後の一言はワープの影響でかき消されたがそれはハラウン艦隊要員全員の心情を表と同時に敗北宣言であつた。

後に第一次地球会戦と呼ばれる此の戦いは時空管理局の完全なる敗北であつた。

クラウディア

墜落確実が分つた『クラウディア』艦内に取り残された者達は僅かでも生存率を高める為必死の作業を行つていた。

機動六課の残留メンバーなのは・スバル・ティアナの三名は最も危険な衝突艦が突き刺さつた区画を高Gに耐えながら率先して作業をし今、間も無く終えようとしていた。

「よし、此で何とか…」

「なのはさん、スバル早くこつちへ!」

自分達が最後だと確認してティアナの所に向かおうとしたがなのはが衝突艦の裂け目から見える内部から何かを感じた。

「…スバル先に行つて」

スバルを半端突き飛ばす形で追いやつてなのはは衝突艦の内部に入つて行つた。

「スバルなのはさんは!？」

「分からない、あの中に…」

衝突艦内部は以外に狭かつたが垂直になつていた上殆ど崩れていた。たがなのはそこから瓦礫を退け迷う事無く、そう文字通りに導かれる様にある物を見つけた。

それは大きな形状共にラグビーボールの様な機械物であつた。

「何だろう、此…」

ティアナ達の必死の自身への呼び声で我に振り返りそれを持って急ぎ動いた。

ティアナ達の所にたどり着く数歩手前で『クラウディア』が地表に接触した。

自動操縦と重力緩和装置が僅かに生きていたのか艦自体が崩壊しなかつたが奥へ吹き飛ばされながらティアナ達は見てしまった。

その衝撃で出来た裂け目からなのはが艦外へ、高濃度放射能の外へ吹き飛ばされてしまった光景を！

??????

『命令、時空管理局の次元航行艦が潮岬周辺に墜落した模様。
直ちに現地へ特殊部隊を送り艦体を搜索、可能であれば状態を調査
し再利用或いは修理可能な搭載兵器を回収せよ。
繰り返し……』

第4話 完敗！ハラオウン艦隊（後書き）

感想、御意見お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4778v/>

魔導戦艦ヤマト

2011年11月17日19時57分発行